

中 学 校

平成 2 6 年度

教育研究員研究報告書

社 会

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	研究の仮説	2
IV	研究の方法	2
V	研究の内容	4
1	研究の内容	4
2	検証授業	10
(1)	地理的分野	10
(2)	公民的分野	16
VI	研究の成果	23
VII	今後の課題	24

研究主題

基礎的・基本的な技能の習得を図る指導とその評価の工夫

I 研究主題設定の理由

現行の中学校学習指導要領が全面実施され、今年度で3年目を迎えた。この間、中学校社会科においては、基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得に努めるとともに、思考力・判断力・表現力等を確実に育むため言語活動の充実を図り、社会参画に関する学習が重視され、様々な授業実践が行われてきた。

従前の学習指導要領における課題となっており、現行の学習指導要領へと改訂されるに当たって考慮された平成19年度国立教育政策研究所が実施した「特定の課題に関する調査」によれば、地理的分野においては「地形図や資料を読み取り、比較しながら、わかったことをまとめる力が不十分」であること、歴史的分野においては「複数資料から必要な情報を読み取り、総合的に解釈することに課題」があること、公民的分野においては「自分の考えを根拠をあげて説明する力が不十分」であることが明らかにされていた。その後、現在に至るまでこの傾向が継続していることは、東京都教育委員会が実施した「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果及び「東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査報告書」からも明らかである。

中学校社会科の目標である「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察」することは、情報化の進展に対応する上で重視されており、資料を適切に収集、選択、処理、活用し、それらの資料に基づいて多面的・多角的に考察し公正に判断する態度を身に付けさせることにもつながる。我々教育研究員は、資料活用の技能の習得が十分でないことが、思考力・判断力・表現力のより一層の伸長を難しくしているのではないかと考えた。単元指導計画に資料活用の技能の習得場面を意図的、計画的に設定することで、社会科の目標の達成につながると考え本主題を設定した。

II 研究の視点

本研究は、教科や分野、単元のねらいを達成するため、中学校社会科の指導の改善・充実を図ることを目的として、研究主題を「基礎的・基本的な技能の習得を図る指導とその評価の工夫」と設定し、次の3点を研究の視点とし、基礎的・基本的な技能の習得を図るよう、研究を行った。

- 社会科における基礎的・基本的な技能を明確にする。
- 分野の特質を踏まえた基礎的・基本的な技能の習得の過程を明確にし、単元指導計画において精選を図る。
- 単元指導計画に示された基礎的・基本的な技能の習得に関する指導・評価の工夫を具体的に示す。

Ⅲ 研究の仮説

各分野・各単元・一単位時間において、習得すべき技能を明確にし、習得場面を単元指導計画の中に位置付け、各場面において実践することで生徒の技能の習得を図ることができると仮説を立てた。

中学校社会科「平成 23 年度教育研究員研究報告書」において、「学びのスパイラル」と概念付けられたものは、以下の 3 点である。

- ① 単元計画の段階で、1 単位時間ごとの授業を通して確実に習得させたい知識、概念や技能を明確にし、意図的・計画的に配置し、指導する。
- ② 習得した知識、概念や技能を確かなものにするために、既習事項や本時内で習得した知識・技能を活用し、主体的に学ぶ場面を設定する。
- ③ 思考力・判断力・表現力を育むために、既習事項や本時内で習得した知識・技能等を活用し、主体的に考察したり表現したりする場面を設定する。

以上の 3 点を日常の授業において反復することで知識・概念・技能の定着化が図れ、思考・判断・表現の力が習得できるというものである。

このことを踏まえ、本研究では、単元指導計画の中で技能の習得と活用を意図的、計画的に設定することを通して、技能の習得が確実なものになると考えている。

また、単元指導計画に基づいた、技能に関する明確な評価規準を設定することで、技能の習得状況を適切に把握することができ、段階的に技能を向上させていくことができる。また、多くの生徒がおおむね満足できる状況に到達できるよう、発問や資料の提示方法など授業展開の工夫を合わせて行い、技能の確実な習得を図る。

Ⅳ 研究の方法

- 以下の資料を参考に文献研究を行う。
 - ・「特定の課題に関する調査（社会）」調査結果（国立教育政策研究所、平成 20 年 6 月）
 - ・「平成 25 年度児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書」（東京都教育委員会、平成 25 年 11 月）
 - ・「東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査報告書」（東京都教育委員会）
 - ・中学校学習指導要領解説社会編（文部科学省、平成 20 年 9 月）
 - ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校社会】（文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター、平成 23 年 11 月）
- 検証授業や各学校での研究員の取り組みで得られた成果と課題をまとめる。

【研究構想図】

教科の目標より

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和的で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

生徒の実態

地理的分野

地形図や資料を読み取り、比較しながら、分かったことをまとめる力が不十分。

歴史的分野

複数資料から必要な情報を読み取り、総合的に解釈することに課題。

公民的分野

自分の考えを根拠をあげて説明する力が不十分

(国立教育政策研究所調査より)

資料活用の技能は 40.2%と観点別で評価が最も低く、「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」も 30.2%と最も低い。(平成 25 年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書」より)

授業の実態

地理的分野

写真や地形図から地理的事象を見いださせる学習はしているが、生徒に学習したという意識は低い。

歴史的分野

年表や地図、歴史地図を活用した授業は行っているが、学習した内容を年表形式や関係図にまとめる授業が行われていない。資料などをみて、疑問点や調べたい課題を見つけたりする学習はしているが、生徒に学習したという意識は低い。

公民的分野

資料に基づいて考えたり、グラフや表、図を読み取ったりすることに重点をおいた学習はしているが、生徒はそのような学習を苦手を感じている。

研究主題

基礎的・基本的な技能の習得を図る指導とその評価の工夫

研究の視点

- 社会科における基礎的・基本的な技能を明確にする。
- 分野の特質を踏まえた基礎的・基本的な技能の習得の過程を明確にし、単元指導計画において精選を図る。
- 単元指導計画に示された基礎的・基本的な技能の習得に関する指導・評価の工夫を具体的に示す。

研究の仮説

各分野・各単元・一単位時間において、習得すべき技能を明確にし、習得場面を単元指導計画の中に位置付け、各場面において実践することで生徒の技能の習得を図ることができる。

研究の方法

- 以下の資料を参考に文献研究を行う。
 - ・「特定の課題に関する調査(社会)」調査結果(国立教育政策研究所、平成 20 年 6 月)
 - ・「平成 25 年度児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書」(東京都教育委員会、平成 25 年 11 月)
 - ・中学校学習指導要領解説社会編(文部科学省、平成 20 年 9 月)
 - ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校社会】(文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター、平成 23 年 11 月)
- 検証授業や各学校での研究員の取り組みで得られた成果と課題をまとめる。

V 研究の内容

1 研究の内容

(1) 生徒の学習の実現状況

現行の学習指導要領へと改訂されるに当たって考慮された平成 19 年度の国立教育政策研究所が実施した「特定の課題に関する調査」以降も、資料活用の技能の習得に課題があることが明らかになっている。【表 1】は、東京都教育委員会が実施した「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果における中学校社会科の観点別の正答率の推移についてまとめたものである。

【表 1】中学校社会科の観点別正答率の推移（平成 23 年度から平成 25 年度まで）

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
社会的な事象への関心・意欲・態度	87.8%	83.9%	78.6%
社会的な思考・判断・表現	43.6%	49.8%	46.8%
資料活用の技能	46.8%	43.2%	40.2%
社会的事象の知識・理解	59.0%	42.6%	57.0%
教科の内容	56.7%	49.0%	52.3%

【表 1】より、実施年度により教科の内容に関する正答率は異なるものの、資料活用の技能に関する正答率は、他の観点より低い傾向にあることが分かる。ただし、実施時期は毎年中学校第 2 学年の 7 月であることから、第 1 学年及び第 2 学年 7 月までの学習状況であることに留意する必要がある。

また、【表 2】は、「東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査報告書」における分野ごとのまとめと指導の改善についてまとめたものである。

【表 2】分野ごとのまとめと指導の改善（ ）内は年度

	○成果及び△課題
地理的分野	○基礎的・基本的な地理的技能については身に付いてきている。(24、25) ○基礎的・基本的な作図などの地理的技能は身に付いてきている。(26) △地図を活用し統計資料と結び付け、身近な地域の様子をまとめる学習の継続が求められる。また、地球儀や地図帳を活用し、主な国々の名称と位置を取り上げ、世界の地域構成を大観させる学習の一層の充実が求められる。(24) △地図を活用し統計資料と結び付け、日本の諸地域の特色を捉えさせる指導が必要である。また、地球儀や地図帳を活用し、主な国々の名称と位置を取り上げ、世界の地域構成を大観させる指導が必要である。(25) △地球儀や地図帳を活用し、世界の州ごとの特色や日本との結び付きを理解させ、世界の諸地域の特色を大観させる指導が必要である。(26)
歴史的分野	△地理的条件などに着目した学習を充実させることが求められる。(24)
公民的分野	△基礎的・基本的な事項について、単に用語の理解にとどめるのではなく、その意義や背景などと結び付ける指導の一層の充実が求められる。(24) △基礎的・基本的な事項について、用語を正しく理解するとともに、時代背景などと結び付けて考えさせる指導が必要である。(25) △政治・経済の諸制度を成り立たせている基本的な考え方や背景について理解させる指導が必要である。(26)
論述問題	○身近な社会的事象に対する関心をもたせ、諸資料に基づき多面的・多角的に考察し表現する力は身に付いてきている。(25) ○諸資料を的確に読み取ることある程度できている。(26) △諸資料に基づき多面的・多角的に考察し表現させたり、社会的事象に対する関心を高めさせたりする指導が十分ではないと考えられる。今後は、記録、要約、説明、論述といった学習活動の一層の充実

	が求められる。(24) △記録、要約、説明、論述といった言語活動を行い、自ら課題を見いだし解決させる指導が必要である。 (25) △言語活動をより一層重視し、社会的事象から課題を見いだし、多面的・多角的に考察して、適切に表現する力を身に付けさせる指導が必要である。(26)
--	---

【表2】より、地理的分野においては、基礎的・基本的な地理的技能は身に付いているが、分野の目標を達成するために、地図を含めた複数資料の関連付けや地球儀や地図の活用に関連する課題があることが分かる。歴史的分野においては、地理的条件に着目した学習指導、公民的分野においては、用語や諸制度の意義や背景などについて理解させる学習指導に課題があることがそれぞれ明らかになった。さらに、論述問題からは諸資料に基づき多面的・多角的に考察し表現する力は身に付いてきているが、社会的事象から課題を見いだすことに課題があることが明らかになった。

(2) 中学校社会科における基礎的・基本的な技能

ここでは、「中学校学習指導要領」及び「同解説社会編」を基に、基礎的・基本的な技能について明らかにした。(【表1】)

【表3】教科、各分野の目標における資料活用の記述

	中学校学習指導要領社会目標	中学校学習指導要領解説社会編
社会科	…諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、…	…資料を適切に収集、選択、処理、活用し、それらの資料に基づいて多面的・多角的に考察し公正に判断する態度を身に付けさせる…
地理的分野	…様々な資料を適切に選択、活用して…	…資料の収集、選択、処理、活用に関する能力… …活用できる資料としては、…最も重要な役割を果たしているのが地図である。 …読図力、作図力などの地理的技能…
歴史的分野	…様々な資料を活用して…	…文献や絵図、地図、統計など歴史学習にかかわる様々な性格の資料や、作業的・体験的な活用によって得られた幅広い資料の中から、必要な資料を選択して有効に活用する…
公民的分野	…様々な資料を適切に収集、選択して…	…関連のある資料を様々な情報手段を効果的に活用して収集し、かつ考察に必要な情報を合理的な基準で選択し分析する能力… …合理的な基準を見いだす能力…

【表3】より、分野の特質を踏まえた基礎的・基本的な技能が明らかになるとともに、第3学年で学習する公民的分野については、地理的分野及び歴史的分野より高度な技能が求められていることが分かる。

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」には、学習指導要領を踏まえ、評価の観点及びその趣旨の記述がある。これより、社会科及び各分野の「資料活用の技能」の趣旨について【表4】にまとめた。

【表4】「資料活用の技能」の趣旨

社会科	社会的事象に関する諸資料から有用な情報を適切に選択して、効果的に活用している。
地理的分野	地図や統計、映像など地域に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。
歴史的分野	年表や歴史地図、映像など歴史に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。
公民的分野	統計や新聞、映像など現代の社会的事象に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。

【表4】より、分野の特質を踏まえて、資料の種類には、相違点があるものの、「資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめ」ることに共通点が見られる。

以上の点を、実際の授業場面における生徒の取組や教師が生徒に身に付させている技能の面から考察し、本研究における基礎的・基本的技能を以下の8点に整理した。

- | | |
|----------------|----------------------|
| ① 見て、読み取る技能 | ⑤ 関連させる技能 |
| ② 変化や特色を見付ける技能 | ⑥ 収集し、取捨選択する技能 |
| ③ 違いを見付ける技能 | ⑦ 自分の言葉にする技能 |
| ④ 比較する技能 | ⑧ 自分の言葉を文字にする、発表する技能 |

(3) 各分野における基礎的・基本的技能

本項では、前項を踏まえるとともに、学習指導要領解説を基に、各分野における基礎的・基本的な技能についてまとめた。

ア 地理的分野

(ア) 地理情報の活用に関する技能

- ・ 諸情報から地理情報を選別し、地理情報の性格、種類等を捉える技能
- ・ 地理情報の収集に関する技能
- ・ 情報の地理情報化の視点や方法に関する技能
- ・ 地理情報の処理や表現に関する技能

(イ) 地図の活用に関する技能

- ・ 見知らぬ地域を地図を頼りにして訪ね歩く技能
- ・ 学習や日常生活で出てくる地名に関心をもち、その位置を確かめようとする技能
- ・ 既存の地図から地理的事象を読み取ったり、地理的事象を地図を通して追究し捉えたりする技能
- ・ 地域の諸事象や情報の地図化の適否を判断し、適切に地図化する技能
- ・ 略地図を描く技能を身に付け、略地図で位置を示したり、略地図を使って諸事象をとらえ、説明したりする技能

イ 歴史的分野

歴史情報の活用に関する技能

- ・ 歴史に関する様々な資料を収集し、資料から必要な資料を選択する技能
- ・ 資料から歴史的事象の意味・意義や各時代の特色を読み取ったり、まとめたりする技能
- ・ 複数の資料を比較し、共通点や相違点に着目できる技能
- ・ 読み取った資料を基に、言葉や図などで表したり、説明したりする技能

ウ 公民的分野

- ・ 統計資料、グラフ資料、新聞等を読み取り、自分の考えたことの根拠にする技能
- ・ 法令等の文書資料を読み取り、解釈する技能
- ・ レポート作成の際に、グラフや統計資料等を収集・選択することができる技能
- ・ 考察に必要な情報を合理的な基準で選択し分析できる技能
- ・ 収集した資料の中から客観性のあるものを選択できる技能（統計の数値や年号の違いに気付く力、資料批判力）

- ・関連のある資料を様々な情報手段を効果的に活用して収集したり、まとめたりする技能
情報化が進む現在、情報を批判的に見る力はより一層大切になっている。小学校学習指導要領においては、社会科第5学年の内容(4)に、「情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする」とある。小学校・中学校の内容を系統的に見ていくためにも、「資料批判力」は大切であると考え。

(4) 各分野における指導とその評価の工夫

ア 各分野に共通した指導の工夫として、次のような発問を心がけた。

(ア) 必要な資料を収集・選択する力が身に付くような発問

主に、単元及び一単位時間の導入場面において、資料を提示し、「～は何だろう」などのように生徒が主体的に学習に取り組むことができるようにする。

(イ) 資料を見て分かること、比較・変化を読み取らせるように仕向ける発問

主題図などを提示し、凡例に基づいて「どこで、どのような～が分布しているか」、さらに同質の資料を提示し、「何が、どのように変化しているか」などのように、生徒が具体的に読み取る内容を明確にする。

(ウ) 読み取った内容について、疑問を投げかけ、背景を考えさせる発問

読み取った結果について、「このような変化が見られたのはなぜだろう」などのように、特色ある社会的事象の理由について、根拠を求めるような発問をする。

イ 授業場面における評価として、次のような工夫をした。

(ア) 授業後に評価を行い、次時の指導に生かすためにワークシートを活用した。

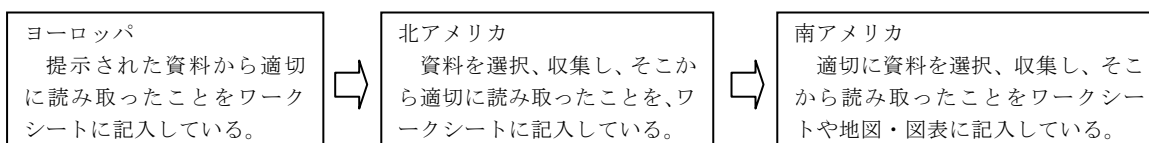
授業者は、授業中に机間指導を行うとともに、生徒の学習活動をより適正に評価するために、毎時間ワークシートを用いた。一単位時間ごとに授業者は、生徒が記入したワークシートを集め、評価規準に基づいて評価をするとともに、努力を要する状況の生徒に対して、ワークシートに適切な指導を記入したものを生徒に返却し、次時の学習に生かせるようにした。

(イ) 生徒の学習実態を把握するとともに指導に生かすために、座席表を活用した。

(ア)で行った評価を、座席表に記入し、授業者は授業に臨んだ。「努力を要する状況」の生徒の学習状況を把握することで、授業内に指導対象を焦点化した。

(ウ) 単元を通してレベルアップできる評価規準を設定した。

単元の指導計画を作成する際に、指導の重点化・焦点化を図るとともに、下記のように観点ごとの系統的な指導計画・評価計画を作成した。



(エ) 生徒に分かる言葉で表現した指導目標を提示した (ルーブリック、模範解答)。

ウ 各分野の指導上の工夫

(ア) 地理的分野

系統的な指導計画・評価計画

現行の学習指導要領では、学習内容や学習活動を段階的に発展、深化できるように、学習内容が構成されている。

大項目(1)「世界の様々な地域」では、中項目ア「世界の地域構成」で地球儀や世界全図の読み取りを中心とした学習を行い、中項目イ「世界各地の人々の生活と環境」で共通点や相違点を探す学習活動を行い、資料活用技能の習得を図る。中項目ウ「世界の諸地域」においては、地球儀、世界地図、地図帳、衛星画像などを有効に活用し、地域的特色を理解した成果を地図上に表現する。中項目エ「世界の様々な地域の調査」では、それまでに学んできた大項目(1)の各項目の学習を踏まえて主題を設定し、調査の見通しを立て、資料を収集し、地理的事象を調査・探究する。その際、主題を明らかにするために、必要な各種資料とその収集方法を吟味し、資料の収集、選択を行う。そして、調査を通して、収集した資料を活用してその内容を読み取ったり、地図化したりする。さらに調査した結果を整理し、ふさわしい記述や説明の方法を考え、レポートにまとめる。ここで培われた技能・調査方法は、この後の大項目(2)「日本の様々な地域」の学習に活用する。

大項目(2)「日本の様々な地域」においても、中項目ア「日本の地域構成」及び中項目イ「世界と比べた日本の地域的特色」で、地球儀や地図を活用し国土を大まかに捉えるとともに、世界的視野や日本全体の視野から見た日本の地域的特色を取り上げる。ここでは、地域差に着目させるなど比較し関連付ける学習活動が行われる。それを受けて中項目ウ「日本の諸地域」では、地域的特色を追究するための適切な課題を設定し、様々な資料を適切に活用できるようにする。中項目エ「身近な地域の調査」では、上記で培われた技能・調査方法に加えて野外での観察や調査を取り入れ、地域の傾向性や規則性を見いだすほか、作図に関する技能を高めるような学習活動を展開する。

以上のような地理的分野の学習内容の構成上の特色を踏まえ、世界の諸地域における指導計画及び評価計画の一例を作成した。【表5】

中項目ウ「世界の諸地域」を単元として捉え、各州の学習において指導の重点化を図るとともに、評価の観点を焦点化した。本研究に関連する資料活用の技能については、ヨーロッパ州、北アメリカ州、南アメリカ州で重点的に指導をするとともに、評価を行うこととした。また、資料活用の技能が高まるように、学習内容を資料の「読み取り」、「選択、収集」、「地図や図表への記入」と段階的に設定した。

【表5】「世界の諸地域」の指導・評価計画（例）（27時間扱い）

単元名	主題例	評価の観点				重点を置く評価活動
		関	思	技	知	
アジア (6時間扱い)	人口急増と多様な民族・文化	●			●	・人口問題の出現や多様な民族構成、文化形成の背景など、アジアの地域的特色の考察に意欲的に取り組んでいる。
ヨーロッパ (5時間扱い)	EUの発展と地域間格差			●	●	・国境を越えた結び付きがあるEU構成国の相互関係や域内の地域間格差の実態について、提示された資料から適切に読

						み取ったことをワークシートに記入している。
アフリカ (3時間扱い)	モノカルチャー経済下の人々の生活		●		●	・貿易や先進国との結び付きなどの追究を通して、アフリカの地域的特色について多面的・多角的に考察し、ワークシートにまとめている。
北アメリカ (5時間扱い)	大規模農業と工業の発展			●	●	・北アメリカにおける農産物の生産及び工業都市の分布、流通、消費について、資料を選択、収集し、そこから適切に読み取ったことを、ワークシートに記入している。
南アメリカ (4時間扱い)	森林破壊と環境保全			●	●	・南アメリカにおける環境問題やエネルギー問題について、適切に資料を選択、収集し、そこから読み取ったことをワークシートや地図・図表に記入している。
オセアニア州 (4時間扱い)	アジア諸国との結び付き	●	●	●	●	・オセアニアにおける貿易品の動向や輸出入の相手国の推移、アジア諸国からの移民の受け入れなどの追究を通して、オセアニア州の地域的特色について多面・多角的に考察し、ワークシートや地図・図表に記入している。

(イ) 歴史的分野

a 系統的な指導計画を立てる

歴史的分野を「古代までの日本」と「中世から現代」までの大きく2つに区分する。これは、「中世」以降の学習において、他の時代との共通性や相違点に着目することで、各時代の特色をより捉えることができるからである。このことから、次のように指導計画(例)を作成した。(【表6】)

【表6】歴史的分野における資料活用の技能に関する指導計画(例)

	重点を置く学習活動
古代までの日本	<ul style="list-style-type: none"> ・時代の変化を読み取ることができる、気付くことができる学習課題を設定し、課題解決のために必要な情報を収集・選択する。 ・資料を適切に読み取ったりまとめたりする。「政治」「経済」「外交」「文化」のいずれかについて調べる。
中世の日本 から 現代の日本	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的事象を多角的・多面的に考察できる資料を選択して有効に活用する。 ・各時代の特色を捉えたり、時代の転換の様子を捉えたりするために資料を活用する場面を設定し、各時代を比較したり、関連付けたりする。 ・「政治」「経済」「外交」「文化」という視点で時代を横断的に意識して資料を読み取るようにする。

b 学習した内容を活用する(例. 年表の作成)

時代ごとに歴史年表を作成し、前の時代との比較を行い、既習事項の知識や資料と現在学習している時代の知識や資料を関連付けて、時代の特色を捉えることが可能になる。

c 資料の効果的な提示

文献や絵図、年表、地図、統計などの複数の歴史資料から共通点や相違点を読み取る。

(ウ) 公民的分野

a 系統的な指導計画・評価計画

公民的分野の大項目(1)「私たちと現代社会」は、現代社会の特色や、現代社会における文化の意義や影響を理解させるとともに、現代社会を捉える見方や考え方の基礎について、具体的な社会生活と関連付けるなどして理解させ、以降の学習の導入として位置付けられている。このことを踏まえ、大項目(1)「私たちと現代社会」及び大項目(3)「私たちと政治」において、次のように指導計画を作成した。(【表7】)

【表 7】 公民的分野における資料活用の技能に関する指導計画の一部（例）

資料活用の技能の評価規準例	
(1) 私たちと現代社会 ア 私たちが生きる現代社会と文化	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバル化、情報化、少子高齢化が見られることを証明するグラフや写真、統計資料等を適切に収集して、読み取ったり、図表などにまとめたりしている。（地理的分野と歴史的分野で培った成果を生かす）
イ 現代社会を捉える見方や考え方	<ul style="list-style-type: none"> ・対立と合意、効率と公正等の視点から自分の身の回りのルールを見つけることができる。 ・見つけたルールを読み取ることができる。 ・現在あるルールを他のものと比較検討して、効率と公正の視点から評価することができる。（資料批判力、法令の解釈）
(3) 私たちと政治 ア 人間の尊重と日本国憲法の基本原則	<ul style="list-style-type: none"> ・日本国憲法の人権の条文を読み取ることができる。 ・条文と世の中にある人権課題と結び付けることができる。 ・人権課題の現状を分析して説明するために必要な統計資料を見つけて読み取ることができる。（条文解釈とデータ読み取り）
イ 民主政治と政治参加	<ul style="list-style-type: none"> ・日本国憲法の統治機構の条文や条例を読み取り、解釈することができる。 ・国民主権や議会制民主主義地方自治の概念と条文のつながりを理解することができる。 ・現在の政治の現状を見るために、複数の新聞記事から必要なものを選び、読み取ることができる。 ・現在の政治課題を説明するために、世論調査などの統計資料を読み取り活用することができる。 ・統計資料の対象や質問などを吟味して統計資料の使い方が分かる。（法令の解釈、資料批判力）

2 検証授業

(1) 地理的分野

ア 単元名 (1) 世界の様々な地域 ウ世界の諸地域 (カ) オセアニア州

イ 単元の目標

(ア) オセアニア州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる主題を基にオセアニア州に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとする。

(イ) オセアニア州の地域的特色について、その主題を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。

(ウ) オセアニア州の地域的特色に関する様々な資料を収集し、その有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりする。

(エ) オセアニア州の地域的特色を理解し、その知識を身に付ける。

ウ 単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象への知識・理解
・オセアニア州に暮らす人々の生活の様子を、アジア諸国との結び付きを基に、オセアニア州の地域的特色に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。	・オセアニア州の地域的特色を、アジア諸国との結び付きを基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・オセアニア州の地域的特色から設定された様々な課題の根拠となる有用な資料を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	・オセアニア州について、アジア諸国との結び付きを基に地域的特色を理解し、その知識を身に付けている。

エ 単元について

オセアニア州は、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋の島々をまとめた地域である。オーストラリアをはじめとしたオセアニア州の国々の中には、イギリスの植民地であった国があることから、以前はヨーロッパ州との結び付きが強かったが、近年はアジア州との結び付きが強まっている。

本単元は、「中学校学習指導要領 社会科の大項目(1)「世界の様々な地域」の中項目ウ「世界の諸地域」の最後に取り扱う。中項目を通して、本研究主題である基礎的・基本的技能の習得を、意図的・計画的に図ってきたが、次の中項目エ「世界の様々な地域の調査」において、生徒自身が調査活動を行うことができるように、技能の習得・活用の場面を多く設定した。

さらに、中項目の「それぞれの州の地域的特色を理解させる」ための学習内容と関連付けることを強く意識した。具体的には次の3点である。

- ・アジア諸国の経済成長とオセアニア州との結び付きが強まっていること
- ・アジア諸国の経済発展とヨーロッパ諸国の経済力の相対的低下及びEUへの統合のこと
- ・アフリカ諸国のモノカルチャー経済と植民地の独立による経済力の低下のこと

オ 単元の指導計画と評価計画（4時間扱い）

時	学習項目	学習内容と活動	関	思	技	知	評価規準・評価方法 【重点を置いた基礎的・基本的技能】
第1時	オセアニア州の大観 オセアニアの自然環境	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境に視点を当て、オセアニア州を大観する。 ・オーストラリア大陸や南太平洋の島々に見られる特色を、地図や雨温図、写真などから考察する。 ・ニュージーランドの農業の特色を自然環境の特色と関連付ける。 	●				<ul style="list-style-type: none"> ・オセアニアの自然環境及び地域の歩みに関心をもち、地域的特色を意欲的に追究しようとする。(観察) ・諸資料からオセアニアの自然環境の特色を読み取ることができる。(観察・ワークシート)【①】 ・ニュージーランドに関しては、既習事項であるヨーロッパの気候と関連付けて捉えようとする。(ワークシート)
第2時	自然環境の影響が多い オセアニアの産業 (オーストラリアを中心に)	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリアやニュージーランドで行われている農業と自然との関係を考察する。 		●			<ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリア大陸で放牧が盛んな地域とそうでない地域が見られる理由を、気候の特色と関連付けながら考察し、説明することができる。(ワークシート) ・資料や図から、オーストラリアの農業地域の分布を説明することができる。(発表・ワークシート)【⑤】
第3時 本時	アジアとの関係が深まる オセアニアの工業 (オーストラリアを中心に)	<ul style="list-style-type: none"> ・近年深まりつつあるアジアとの関係を、豊富な鉱産資源や貿易相手国の変化、EUの統合との関連で考察する。 		●		●	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリアの貿易の変化についての資料を、適切に選択することができる。(観察・ワークシート)【⑥】 ・グラフや地図から、オーストラリアの鉱産資源の分布の様子を読み取るとともに、貿易相手国の変化から、オーストラリアとイギリスの関係の変化やアジアとの関係の深まり、APECの意義を考察し、説明することができる。(発表・ワークシート)
第4時	移民と多文化社会 (オーストラリアを中心に)	<ul style="list-style-type: none"> ・移民によって形成された、オーストラリアやニュージーランドの社会の成り立ちについて理解する。 ・多文化社会の問題点やそれを克服するための方法について考察する。 		●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ・先住民との共存や異文化理解の必要性など、多文化社会で発生することが予想される問題点とその克服のための取り組みについて考察し、説明することができる。(発表・ワークシート)【⑥】 ・オーストラリアの歩みと共生のための取り組みについて、理解している。

カ 本時（全4時間中の第3時間目）

(ア) 本時の目標

- ・ 鉱産資源の分布に注目し、オーストラリアの産業の特色を捉えることができる。
- ・ オーストラリアがアジアとの結び付きを強めた理由について、既習事項を基に有用な情報を適切に選択し、その背景を考察することができる。

(イ) 本時の展開

時間	学習内容	指導上の留意点	評価規準・評価方法 【基礎的・基本的技能】
導入 5分	○オーストラリア産牛肉のマークを見る。 発問1 「このマークは何だろう。」① ・「スーパーで見たことがある。」 ・「CMで宣伝していた。」 ・「肉のパックに付いていた。」	・前時の学習を踏まえ、農作物と同様に鉱産資源においても日本との関わりが強いことに気付かせる。	
展開 35分	○オーストラリアの鉱産資源の分布を理解する 発問2 「オーストラリアでは、どこでどのような鉱産資源が産出されているだろう。」② ・鉄鉱石や石炭が多い ・鉱産資源の種類が豊富 ・北西部と南西部に偏っている など ○鉱産資源の輸出先から、アジア諸国との関わりを理解する。 発問3 「鉱産資源の輸出先は、どんなところが多いのだろう。どのような資料を見れば、それが分かるだろう。」② ・アジアが多いが、昔はイギリスだった など ○「オーストラリアの貿易相手国」のグラフから、近年はアジア諸国への輸出が増えていることを確認し、2009年の輸出相手国上位3か国を記入する。 ○ 輸出相手国の変化した理由を考察する。 発問4 なぜオーストラリアの輸出相手国が、イギリスからアジア諸国に変わったのだろう？これまで学習したことと、必要な資料を選択して推論してみよう。③ ・イギリスとの関係が悪くなったから、アジアとの関係が深まった。 ・オーストラリアにとって地球の裏側にあるイギリスより、距離が近いアジアのほう貿易しやすい。 など ○考察した結果を、「イギリスは、～」「アジアは、～」の形式で黒板に掲示し発表する。	・オーストラリアでは、鉄鉱石が北西部、石炭が東部に分布していること、地形と重なると石炭が山脈の麓で採掘されていることに気付かせる。 ・鉱産資源はオーストラリアの主要な輸出品であるのと同時に、日本の産業にとっても重要な輸入品であることに気付かせる。 ・スポーツの国際大会などを例にアジア諸国とオーストラリアとの結び付きを考えさせる。 ・グラフを拡大したものを黒板に掲示する。 ・考察するために有用な資料を選択させる。 ・資料中の年代と輸出相手国に着目させる。変化があった年代にヨーロッパ諸国やアジア諸国のできごとを、既習事項と関連付けて考察させる。 ・探す手だてが見つからない場合は、いわゆる「4つのW」にあてはめて考えさせるようにしたり、「経済成長」などのキーワードを与えたりする。 ・相手国が変わったのは1960年代～70年代の間であり、ヨーロッパでECによる統合が始まった時	【技能】 オーストラリアの鉱産資源の分布について凡例と方位を基に表現することができる。（観察、ワークシート）【①】 〔解答例〕 「おおむね満足できる状況」(B) ・鉄鉱石は北西部に分布し、石炭は東部に分布している。 【技能】 輸出相手国上位3か国を資料から適切に読み取ることができる。【①】 輸出相手国がイギリスなどヨーロッパ諸国からアジア諸国に推移したことを捉えることができる。【②～⑤】 （観察、ワークシート） 【技能】 オーストラリアの輸出相手国が変化した原因を推論する。根拠となり得る資料を、適切に選択することができる。（グループ学習、観察、発表、ワークシート）【⑥】 【思考・判断・表現】 ヨーロッパにおけるEC、EUという統合への動き、アジア諸国の経済発展を関連付けることができる。（グループ学習、観察、発言、ワークシート） 【解答例】

		<p>期、及び日本の高度経済成長などアジア諸国の発展と重なることに気付かせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題の根拠を考察するために、資料集などから有用な情報となり得る資料を個人で収集するとともに、なぜその資料が有用であるか、課題の結論は何であるかを班で発表し、意見交換する。 	<p>「おおむね満足できる状況」(B)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料から、課題の根拠となり得る1960年代のイギリスのECへの参加と、イギリスとオーストラリアとの関係が薄れていったことを結び付けて読み取っている。 <p>「努力を要する状況」(C)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イギリス、またはアジア諸国のどちらか一方の記述のみ。 ・アジアのほうが距離が近いから。イギリスは距離が遠いから。 <p>[具体的な手だて]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輸出相手国が変わった年代に注目させ、その時期にイギリスを含めたヨーロッパで何が起きていたか。既習事項をキーワードに推論させる。
まとめ 10分	<p>○豊富な鉱産資源を背景とし、新興工業国との結び付きや地理的位置などから、オーストラリアとアジアとの関係が、今後ますます重要になることを考察する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアとオセアニア諸国、さらにはアメリカとの連携の例として、APECを紹介するが、APECの具体的な内容に踏み込まないようにする。 	<p>【思考】 ワークシートに、今回の授業にふさわしいタイトルをつけることができている。 (観察、ワークシート)</p> <p>【解答例】 「おおむね満足できる状況」(B)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アジアと結び付きを深める (オーストラリアの貿易) ・イギリスと別れた(オーストラリアの貿易)など

キ 成果と課題

本検証授業では、オセアニアで中心的な役割を担うオーストラリアが、地理的に遠いヨーロッパとの関係よりも地理的に近いアジアとの関係が深くなっていく過程を、主題図や経年比較のグラフ等を活用して考察した。そしてイギリスからアジアへの結び付きを強めていく背景を考察する中で、EC発足やアジアの経済発展に伴い、鉱産資源の輸出を通じたアジアとの結び付きが強まることを、既習事項を基に推論を立て、有用な情報を適切に収集・選択し、その背景を考察することをねらいとした。

本研究のテーマである基礎的・基本的な技能の面では、「関連させる技能」、「変化や特色を見付ける技能」、「自分の言葉を文字にする、発表する技能」を心掛けて指導に当たった。また、その習得に当たっては、系統的な指導計画を立てるとともに、写真やグラフ、主題図など様々な資料の読み取りを行い、また、前の単元での既習事項との関連を意図的に行い、さらには自分の考えを文章で求めるというような課題の設定をしていくなどの工夫を行った。生徒自らの

学習成果を資料として活用することが、技能の習得に有効であると考えとともに、単元・一単位時間において習得すべき技能の習得過程を明確にして授業を行った。具体的には、アジアの経済発展とASEANの発展、ヨーロッパにおけるECやEUの統合とEU経済圏の形成、アフリカにおける鉱産資源の分布と貿易、北アメリカにおける多民族国家と諸問題、ブラジル（さらにはBRICS）を中心とした南アメリカの発展などの既習事項を資料として活用することで、オーストラリアの現状を推論させ、その根拠となる資料を収集するというものである。

この仮説を検証するため、展開において授業者は、生徒が主体的に考え、資料を収集できるように「読み取った内容について、疑問を投げかけ、背景を考えさせる」などの発問の工夫を行った。また、授業のまとめでは、生徒が班で話し合った内容をワークシートにまとめ、発表するところまでを基礎的・基本的な技能と捉え、その確かな習得を図った。

授業後の生徒のワークシートを分析すると、展開で示した「オーストラリアの輸出相手国がイギリスからアジア諸国に変化したのはなぜだろう」という課題に対して、多くの生徒は、「単に地理的な距離だけでなく、イギリスとの関連が薄れた、その背景にはEC発足と1970年代にイギリスがECに加盟したことが一因になっている」ことを資料から読み取っていた。しかし、以下に例示するように在籍生徒29人中4名の生徒は、資料から十分に読み取ることができなかった。

例1 「努力を要する」状況（C）と判断した生徒

オーストラリアの輸出相手国がイギリスからアジア諸国に変化したのはなぜだろう？
--

解答：距離が近いから。資源が豊富だから。

この生徒の場合、ヨーロッパ州で学習したECの発足、ヨーロッパの地域統合という既習事項を活用することができていなかった。これはオーストラリアの貿易相手国が、イギリスからアジアに変化する時期について、1970年代であることを資料から読み取ることができなかったためであり、世界地図におけるオーストラリアの位置やオーストラリアの鉱産資源の分布という主題図から解答を導き出しただけである。

この状況の生徒には、まずは貿易相手国の内訳と年代に着目させるとともに、「1970年代にイギリスで何が起きたのだろうか?」、「それを説明するには、どのような資料が分かりやすいだろうか?」という発問を行ったところ、次のように解答に変化が見られた。

例2 「おおむね満足できる」状況（B）と判断した生徒の変容

オーストラリアの輸出相手国がイギリスからアジア諸国に変化したのはなぜだろう？
--

解答：ECに加盟したことでイギリスは、ヨーロッパ諸国との関係を強めたから。そのため、位置が近いアジアとの関係が強まった。
--

このように年代と貿易相手国の変化という、資料を読み取る視点を教師が指摘することによって既習事項の成果を活用することができた。しかし、アジアとの結び付きにまで考えが及ばなかった。これはアジアの経済発展を関連付ける過程で、既習事項の定着が不十分だったため、鉱産資源の輸出とアジアの経済発展との関連にまでは至らなかったことが挙げられる。

本検証授業の課題としては、アジアとの関係を強めた要因として鉱産資源の輸出のみを取り上げたが、観光などオーストラリアにおける産業の変化に触れることができなかった。そのた

め、オーストラリアの産業の変化を一面的にしか捉えることができなかつた生徒がいた。また、最後のまとめにおいては、班での話し合いが進む中で、他の班員の表現をそのまま使っている生徒がいた。その他には、生徒の学習状況を適切に把握することができなかつたこともあり、一単位時間における学習形態について、最後は個人で考える場面が必要であり、今後の検討課題としたい。

ク 単元全体の成果と課題

(ア) 成果

この単元の学習後、中項目エ「世界の様々な地域の調査」の学習を行った。地球儀や世界地図、地図帳、写真やグラフなど様々な資料を活用して知識の定着を図るとともに、既習事項を活用して世界地図上や略地図上に表現することなどを通し、地理的スキルを育成することが求められる。その際に主題を設けて追究し、世界の地理的認識を深めさせるとともに世界の様々な国や地域の調査を行う視点や方法を身に付けていくことができた。また、生徒は、収集した情報を並べてまとめるだけの学習に陥ることなく、課題を設定し既習事項と関連付けてまとめることができた。これらのことから、研究主題である基礎的・基本的なスキルの習得は、一定度の成果を上げることができたと考える。また、発問を工夫することにより、主体的に資料を活用することにも成果があったと考えられる。

(イ) 課題

一方で、今回の検証授業において、スキルの習得を十分に図ることができなかつた生徒がいることも事実である。今後の課題としては、生徒のワークシートをより詳細に分析を行うことによって、一人一人の学習状況を的確に把握し、数値で表す評価を行うだけでなく、そのつまづきのポイントに基づき指導を行うなど具体的な手だてを講じていくことが必要である。さらには、その既習事項の定着も、各単元の間で有機的に結び付けていくような系統性も考慮していく必要がある。

(2) 公民的分野

ア 単元名 大項目(1) 私たちと現代社会 中項目イ 現代社会の見方・考え方

イ 単元の目標

(ア) 社会生活における物事の決定の仕方、きまりの意義に対する関心を高め、それらを意欲的に追究しようとする。

(イ) 社会生活における物事の決定の仕方、きまりの意義について多面的・多角的に考察させるとともに、その過程や結果を適切に表現する。また、集団間の問題の解決に当たっては対立と合意、効率と公正の視点から多面的・多角的に考察させるとともに、その過程や結果を適切に表現する。

(ウ) 社会生活における物事の決定の仕方、きまりの意義に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択させて、読み取ったり図表などにまとめたりする。

(エ) 社会生活における物事の決定の仕方、きまりの意義と、現代社会を捉える見方や考え方の基礎としての対立と合意、効率と公正などについて理解し、その知識を身に付ける。

ウ 単元の評価規準

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
単元の評価規準	学校や地域社会など、様々な集団における物事の決定の仕方、きまりを守ることに意味を感じる意欲が高まっている。	社会集団を形成し、その一員として所属する集団やその所属員に関わる問題を解決する際、望ましい決定の方法について、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	自分の意見の根拠となるのに必要な資料を収集することができる。そして、収集した資料の中から、客観性のあるものを取捨選択しながら事実を捉えることができる。	人間は社会的な存在であり、よりよい社会生活を営んでいくためにはきまりや取り決めが必要であることを理解し、その知識を身に付けている。

エ 単元について

(ア) 研究主題と本単元の関係について

中学校学習指導要領社会公民的分野目標(4)では、「現代の社会的事象について関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。」とある。今回は、このうち「事実を正確にとらえ、公正に判断する」ことに注目した。

今回取り上げる報道写真は、撮影した写真の一部が表されたもので、撮影者が読者に意図をもって伝えたものであるため、これを教材として取り上げることは「事実を正確にとらえ、公正に判断する」力を養う上で有効であると考えられる。公民的分野における基礎的・基本的な技能の最大の特徴は、複数のグラフや統計資料を比較、検討して自分の考えた論の根拠にできる力を身に付けることができることである。そのためには、学習を通して法令(憲法や法律、条例)を読み取り、解釈して自分の考えた論の根拠にするなどの学習活動が必要である。

これについて中学校学習指導要領解説社会編には、社会的事象について判断するときには、収集された資料の中から客観性のあるものを取捨選択しながら事実をとらえ、いろいろな立場に立った様々な考え方があることを理解し、その上で判断することを意味して」とある。公民的分野の学習対象は、現代の社会的事象であり、教材としてテレビや新聞、インターネットなど様々な情報を授業において活用する。そこで、本検証授業では情報の見方、「資

料批判力」を習得することで、解説にある「事実を捉え、いろいろな立場に立った様々な考え方があることを理解」することができると考えた。

(イ) 指導と評価の工夫

本単元の第一時では、「事実を捉え、いろいろな立場に立った様々な考え方があること」を習得するための発問・指導の工夫をした。写真「ハゲワシと少女」を題材に、フォトランゲージの手法を用いた。その際、写真資料を確実に読み取ることができるように、生徒への発問を工夫した。例えば、写真に写されている鳥の名前を聞いたり、写真の中で注目して欲しいところをあえて隠したりするなど、生徒の意識が細部に行きわたるように工夫した。次に、読み取ったことを基に、クラスを1グループにつき3～4人の少人数に分けて、写真の深い読み取りや、写真にタイトルをつけることを行った。これは、一斉授業で読み取りをするよりも、一人一人の生徒が主体的に授業へ参加できるようにすること、そして一つの社会的事象を多数の目でより客観的に見るようにすることを意図したものである。グループ活動を取り入れることによって、事実を捉え、いろいろな立場に立った様々な考え方があることをより確実に習得できると考えられる。

第二時以降、ルール作りの授業をするときに、ルール（解決策）を考えたり発表したりするときに、自分の住んでいるマンションや町会のルールを調べてくるように指示した。ここで、自分の意見を述べるときに根拠となる資料を探すことで、自分たちの考えにより説得力をもたせる効果があると考えられる。そしてこの指示が、レポートの「身近なルールの評価」につながると考えた。

第七時のレポート「身近なルールの評価」については、①複数の資料を集めること②集めた資料を比較し、その中から自分の考えを述べる際の根拠とするものを選ぶことを生徒に提示した。

オ 単元の指導計画（7時間扱い）

時	学習項目	学習内容と活動	関	思	技	知	評価規準・評価方法 【重点を置いた基礎的・基本的技能】
第1時 本時	事実を正確に捉える	・「ハゲワシと少女」の写真から、分かることを読み取り、班で意見をまとめ発表する。 ・「ハゲワシと少女」の写真から読み取ったことと、実際の新聞報道の違いを考える。			●		与えられた資料をいろいろな立場から事実を捉えることができる。(発表、ワークシート)【①】
第2時	きまりをつくる①	・マンションでのペットの飼育の問題について、状況を確認する。そして、班ごとに6つの立場に分かれて、自分たちの状況、主張、主張の理由を話し合い、発表する。 ・それぞれの立場に立った解決策（ルール）について各班で話し合い、まとめる。	●				学校や地域社会など、様々な集団にける物事の決定の仕方、きまりを守ることの意味に対する関心が高まっている。(観察、発表、ワークシート)
第3時	きまりをつくる②	・「考える視点シート」に沿って、自分たちの考えた解決策（ルール）を再検討・話し合う。 ・各班で考えた解決策（ルール）について、提案を行う。司会の		●			社会集団を形成し、その一員として所属する集団やその所属員に関わる問題を解決する際、望ましい決定の方法について、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、

第3時		立場の班は、「司会進行シート」に沿って司会・討論を進める。 ・話し合いで解決策（ルール）を決定する。	●		その過程や結果を適切に表現している。（発表、ワークシート）
第4時	きまりをつくる③	・前時に決定した解決策（ルール）を「ルール評価の項目」にしたがって再検討・話し合う。 ・決定した解決策（ルール）を受け入れられるか、守るかを考え、その理由を書く。		●	人間は社会的な存在であり、よりよい社会生活を営んでいくためにはきまりや取り決めが必要であることを理解し、その知識を身に付けている。（発表、ワークシート）
第5・6時	きまりの評価と見直し	・「新たな入居者があり、新たな問題が発生した」という設定の下、問題状況の確認をして、それぞれの立場の状況・主張・主張の理由について班ごとに話し合ったことを発表する。 ・それぞれの班で解決策（ルール）を考え、発表する。話し合いで解決策を決定する。 ・決定した解決策（ルール）が受け入れられるか、またどのような解決策（ルール）なら受け入れられるかを考える。	●		社会集団を形成し、その一員として所属する集団やその所属員に関わる問題を解決する際、望ましい決定の方法について、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。（発表、ワークシート）
第7時	身近なルールの評価	・自分たちの身の周りにあるルール（法律や決まりなど）を評価するレポートを作成する。		●	収集した資料から、客観性のあるものを取捨選択しながら事実を捉えることができる。（レポート）【⑥】

カ 検証授業について（単元指導計画第1時）

(ア) 教材と研究主題の関係

前述のように、公民的分野の学習では、資料としてマスコミュニケーション、特に新聞の活用は不可欠である。また、マスコミュニケーションの学習は公民的分野 大項目(3)私たちと政治 中項目イ 民主政治と政治参加で扱うが、分野全体の学習をより身近なものとして生徒に捉えさせるために、大項目(1)私たちと現代社会 中項目イ 現代社会をとらえる見方や考え方の導入として扱うこととした。さらに、今回取り上げる「報道写真」は、公民的分野の目標(4)「事実を正確にとらえ、公正に判断する」力を養うために有効であると考えた。

(イ) 年間指導計画における本時の位置

本時は、「現代社会をとらえる見方や考え方」の第1時である。本時の前に、「私たちが生きる現代社会と文化」の単元で「情報化」について学習している。現代日本の特色として、少子高齢化、情報化、グローバル化などがみられること、また、文化の継承と創造の意義に気付かせるために、生徒が課題を設けてパネルディスカッションを行った。その際、生徒からは、情報化の議論では、「情報を正しく見ること」や「正確な情報を選ぶこと」が大切であることが取り上げられた。本時では、生徒が学習活動の中で自ら気付いた公民的分野における資料活用の技能の一つを更に深めていきたい。

(ウ) 本時のねらい

資料をいろいろな立場から読み取り、事実を捉える。

(エ) 本時の展開

時間	学習内容	指導上の留意点	評価規準・評価方法 【基礎的・基本的技能】
導入 5分	・最近のテレビや新聞報道で耳にしたできごととは何か考える。	・公民の授業でテレビや新聞のニュースを取り上げるときの見方や考え方を学習することを意識させる。	
展開 35分	・「ハゲワシと少女」の写真をクラス全体で読み取る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">発問1 「この鳥は何か。」①</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">発問2 「ハゲワシが見ているものは何か。」②</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">発問3 「この写真が撮影されたのはどこか。」③</div>	・ハゲワシという鳥が、肉食であり、死んだ生物の肉を食べることを説明する。 ・写真の部分を意図的に隠すことで、生徒の写真に対する関心を引きつける。 ・隠れた部分にある小さな子供が、どのような状態かを想像させる。 ・この写真が撮影された地域をより印象付けるために、アフリカ州の地図を示す。そして、撮影された国を地図で示す。	
	・「ハゲワシと少女」の写真から読み取れることを、グループで話し合い、その後班ごとに出的意見を発表する。	・意見を出し合う時間を3分、意見をまとめる時間を2分、発表時間は1分と予告する。 ・意見をまとめるときは、簡条書きで画用紙等にまとめさせる。 ・1枚の写真から、様々な読み方ができることを意識させる。	
	・自分たちが撮影したカメラマンだったら、写真にどのようなタイトルをつけるか考え、発表する。	・「ハゲワシと少女」の写真に、見出しを付けたワークシートを配布し、話し合ったことをまとめさせる。 ・完成したものを黒板に掲示する。 ・1～2班指名して、タイトルをつけた理由を発表させる。	
まとめ 10分	・ワークシートに「今日の授業の内容をふまえて、授業で分かったこと、感じたこと」を書く。	・テレビや新聞の情報を見たり聞いたりするときは、事実の一部であったり、伝える側の意図が入っていることに気付かせる。 ・必要があれば、1～2名指名し発表させる。	【技能】 与えられた資料をいろいろな立場から事実を捉えることができる。【①】

キ 成果と課題

(ア) 成果

a 資料を読み取る視点の提示

本検証授業では、1枚の写真を読み取る方法を習得させるための方法を話し合った。読み取りを効果的に進めるため、①ハゲワシという鳥に着目させる、②飢餓でやせ細っている子どもを隠すという方法を取った。①は、ハゲワシという鳥の特徴を理解させるため、②はハゲワシと子どもの関係を捉えさせるためにこれらの方法を考えた。これらの工夫を行った結果、大半の生徒がこの写真はアフリカの飢餓の状況を捉えたものであることを理解した。

b グループ学習による読み取る視点の提示

一斉の読み取りの後、グループごとに写真を読み取ったことを話し合い、それについて

クラス全体で話し合った。次にグループで話し合い、写真にタイトルをつけた。「写真家はなぜハゲワシを追い払わなかったのか？」や「装飾品から子どもが奴隷として連れて来られたのではないか？」などの意見が出た。タイトルの意見としては、「飢餓からの SOS」や「食べ物を大切にしよう」、「写真家はなぜ子どもを助けなかったのか」など様々な意見が出た。

(イ) 課題

a 資料批判力と教材の関係

授業のまとめから、多くの生徒は資料には様々な解釈があることを理解していることが確認できた。しかし、中には「アフリカの飢餓を理解して助けるべきだ」「もっと食べ物を大切にしなければならない」などアフリカの飢餓に関わることを理解した生徒が見られた。生徒の資料批判力をさらに高めるためにも、取り上げる題材を考え、生徒の実態に即した教材の提示を行うべきである。

b 誤った解釈と教師の支援

今回の検証授業では、飢餓で苦しむ子どもが身に付けていた装飾品を誤って解釈し、奴隷と予想した生徒がいた。また、タイトルをつけるときに、「弱肉強食」というタイトルを付けた班があった。人権に関わることや状況を伝えるだけでなく、世界平和につなげたり、中には義捐金を募ったりするものも見られた。だが、子どもが付けていた装飾品に着目し、人種差別の問題ではないかという意見もあった。このように、読み取り方によって教師側が授業のときにどこまで生徒に指導をすべきかが課題となった。

c 批判的解釈の習得

検証授業の目標である「資料をいろいろな立場から読み取り、事実を捉える。」ことについて、大半の生徒は目標を達成できたと考えられる。しかし、努力を要する生徒の記述には、「飢餓の現状を改めて理解した。」とか「飢餓の現状を知ったので、これからはアフリカ諸国の人々のために募金をしたい。」「飢餓の現状から、給食を残さないなど食べ物を大切にしたい。」などが見られた。これらは、英語の授業における「フェアトレード」を扱ったり、本校の食育が徹底したりしているためと考えられる。しかし、本検証授業のねらいは、情報を正確に読み取ることや情報を批判的に考察することである。このような記述が見られたことは今後の課題にすべきである。

ク 単元全体の成果と課題

第2時の最初に、本単元の評価規準を示した。特に資料活用の技能では、ルール作りの根拠となる資料を自分で探し、ふさわしいものを選ぶことを求めた。

第2時以降は、架空の町内会のゴミ出しルールをロールプレイで考えさせた。その際、自分の住む町会やマンションのゴミ出しルールを調べさせて、町内会の構成員全員が納得できるようなルールを考えて話し合わせた。生徒が持ってきた資料には、自分の住む地域だけでなく、他の区市町村のものも含まれていた。

第6時から第7時にかけて、新たな場面設定を行った。町内会に外国人の親子が引っ越してきた。日本語はほとんど分からない。ゴミ出しのルールも分からない。だから、ゴミを散

らかしてしまうという場面である。この時点で、授業者は生徒用に外国人の居住に関する資料を用意したが、何人かの生徒は授業者と同じものをインターネットで検索して用意していた。単元の最後に、自分で世の中のルールを探して、他の資料と比較しながらルールを評価させた。

今回、資料活用の技能の評価規準を達成した者は、30人中28人であった。そのうち検証授業において資料活用の技能の評価が「努力を要する状況(C)」だった5人の生徒は、いずれも評価規準を達成した。単元の導入で評価規準を説明し、その中で資料活用の技能の習得を努力したとする3人の生徒はいずれも評価規準に達していた。中でも1人は、「十分満足できる状況(A)」であった。提出したレポートやワークシートの中に、ルール作りで使用した資料を挟んだり、記述に資料を活用したという記述のある生徒は、30人中9人いて、そのうち評価が「努力を要する状況(C)」から「十分満足できる状況(A)」、「おおむね満足できる状況(B)」から「十分満足できる状況(A)」に上がった生徒は5人いた。以上のことから、評価規準の提示や授業者の働きかけにより、技能の習得と活用を図ることができると考えられる。

(7) 自ら資料を選択し、自分の意見の根拠にできる生徒の例(身近な資料の活用)

生徒Ⅰ 身近なルールレポート→資料活用の技能「十分満足できる状況(A)」

「以前クラスでルールについて話し合った時に話題に出た『ゴミ袋の色』『収集所の掃除』『ルール違反への対処』について調べました。例えば、岐阜市では無色透明または中の見える半透明の袋で出すようにする。(中略)というように、ルールを守るようにさまざまな工夫がされている。地域が違えば、住んでいる人たちの考えも変わってきます。なので、その地域で起きたトラブルに合わせて、皆が納得できるようにしっかり話し合っただけでルールを決めていくことが大切だと思います。」

生徒Ⅱ 身近なルールレポート→資料活用の技能「おおむね満足できる状況(B)」

「僕が見つめてきたルールについての意見は、正直良くできているなというのが僕の意見です。なぜなら、実際にゴミのルールを見ると今回のルール作りで時間をかけてみんなで話し合った内容がほとんど入っているし、みんなで話し合っただけのルールよりもくわしく書いてあるからです。さらに、不法でゴミを捨てないように注意書きや曜日と時間がしっかりわかりやすく書いているので、僕はこれがけっこうよくできていて、すごいなあと思ったのが正直なところです。」

レポートを課す際に、「自分の考えを根拠付ける資料を付けなさい」と生徒に指示をした。ほとんどの生徒は自分で探した資料を、レポートに添付することができた。また、生徒Ⅰや生徒Ⅱのように授業で話し合ったことを更に追究し、自ら資料を検索してその中から必要なものを選び、自分の考えの根拠としていることが分かる。

本実践では、「ゴミ収集場所を町内会のどこに作るか」について話し合い、ルールづくりを行った。生徒にとって身近な事例のためか、レポートのテーマに「ゴミの捨て方、収集場所」について取り上げる生徒が多かった。生徒Ⅱの単元の振り返りには、次の記述が見られた。

「自分の身の回りのルールに基づいていけば多分解決すると思ったから。近くのゴミのルールが書いてある資料を持ってきたため。」生徒Ⅱは、一斉授業では理解するのに時間を要することが多い。しかし、今回の単元では身近な事例を取り上げたため、資料を自ら探し、必要なものを選ぶことができた。これらのことから、資料を収集するときには、生徒にとって身近な事例で、資料を収集しやすいものを取り上げると生徒の意欲が高まり、複数の資料を集めてその中から必要なものを取り出すことができると考えられる。

(イ) 単元を通して技能の習得・活用を図ることが出来た生徒の例

(既習の内容を資料として活用)

生徒Ⅲ 身近なルールレポート→資料活用の技能「十分満足できる状況 (A)」

「日野市では、資料①②のように、有料のゴミ袋となっています。これには反対です。理由は税金を払っているのに、有料の日野市だけ金を使わなければならないのか疑問だからです。しかし、資料③④の生ゴミの対処や有害ゴミの出し方などはとても良いルールだと思いました。

これらの良いルールのとり入れや悪いルールの改良をすればさらにより良い社会になるのではないかと思います。」

生徒Ⅲは、レポートの中で賛否を考える際に、複数の資料を使って自分の論の根拠を述べている。普段は、社会問題に対して鋭い発言をしているが、根拠となると正直あと一歩だった。その後、人権のパネルディスカッションでは資料を集める係となり、自分の班の主張をまとめるときの根拠を作った。さらに、裁判員制度のパネルディスカッションで班の意見に対する質問を受けた際に、自分で作成したレジュメを根拠に質問への回答をしていた。つまり、複数の単元を通じて、技能の習得と活用を教師が提示し、問い続けることで、生徒が技能に対する習得・活用ができるようになると考えられる。

(ウ) 定期考査における技能の習得・活用

その後の定期考査において、検証授業で取り上げた技能の定着が図られているかどうかを確かめた。

問. 資料1は2008年に行われた「裁判員制度に関する意識調査」の結果を示したもので、資料2は、2008年に行われた「裁判員制度に関する意識調査」の結果について、P新聞社とQ新聞社の新聞記事の見出しを示したものである。

(1) 資料1をもとにしたP新聞社とQ新聞社の新聞記事の見出しが、資料2に示したように異なっている。P新聞社とQ新聞社のうち、P新聞社は資料1をどのように判断して見出しを書いたと考えられるか。資料1を読み取り、書きなさい。

(2) テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどから情報を受けとるとき、私たちはどのようなことが求められるか。その1つとして考えられることを資料1、資料2から読み取れることをもとにして、「わたしたちには、」で始め、「することが求められる。」で終わる文を、書きなさい。

ヒント: 授業で飢餓の写真を見たことを思い出してください。

文章: 「わたしたちには、することが求められる。」

(2)の問題の正答率は、32名中24名が正解し、75%であった。また、6名は完全解答ではないが部分点とした。完全解答ではない解答例は、次の通りである。「写真を見たままではなく、その人の気持ちを理解」する、「情報を正しく理解」する。つまり、生徒の解答を見ているとおおむね理解している生徒が、クラスの約94%であることが分かる。このように、授業者が技能についての目標を単元の最初から最後まで生徒に語りかけ、資料を集めるように働きかけることによって、技能の習得と活用が図られると考えられる。

(エ) 自ら資料を選択し、自分の意見の根拠に出来なかった生徒の例

ルールづくりのレポートを課した際に、自分で資料を選ぶことができなかった生徒がいた。

ルールづくりのときは、各家庭でインターネットを検索し、プリントアウトしてレポートに添付する生徒が多かった。また、ゴミのルールを探すときに区の広報などから資料を抜き出し、レポートに添付する生徒もいた。しかし、インターネットの環境がない生徒が資料の検索に苦労していたため留意しておく必要がある。

また、他の単元で同じようなレポートを課したときは、自分の考えの根拠となる資料を

探し出すことが難しい生徒がいた。その生徒は、授業で話し合ったことを基に、自分の考えを展開していた。そのため、レポートを書くときに新たな資料を検索、選択するのが難しいようだった。調べ学習やディベート、パネルディスカッションなどを展開する場合、調査していく過程の中で探し出した資料を活用してレポートを書かせるなど、レポートを書くことと調べ学習を上手くリンクさせることが必要である。

さらに、実践を重ねていく中で、統計やグラフの読み取りが不十分な生徒がいた。例えば、地方公共団体の財政収入の読み取りを行うときに、各都県全体の収入はどれくらいか、その中で「地方税」は約何億円かなどを読み取る、基礎的・基本的な技能が身に付いていない生徒がいた。第3学年であっても、統計資料やグラフの基本的な読み取り方を繰り返し指導する場面を設定しなければならないと感じた。

本研究の「具体的に身に付けさせたい技能の指導内容」を活用し、段階を踏んでやる必要があるが、初歩的な段階に戻って確認するなど、段階の行き来も必要である。

VI 研究の成果

1 研究による授業者の意識の変化

私たちは、各所属校における生徒の学習状況から資料の読み取りに課題があると考えていた。普段の授業において生徒は資料の読み取りをおこなっているが、生徒の技能の習得が定着しないというものである。

本研究では、この課題を解決するために様々な資料の分析を行った。その結果、整理したものが、「生徒に身に付けさせたい8つの技能」である。この技能の段階的、系統的な習得を意識して授業に取り組んだ結果、生徒がどこでつまづくか、そして生徒がどのように技能を習得していくのか、ということが明らかになった。これまでは授業者側が資料の読み取りなど、生徒に身に付けさせるべき技能を整理していないまま授業を行っていたことが多かったため、生徒の技能の習得が不十分な面があった。だが、本研究で整理した「生徒に身に付けさせたい8つの技能」を意識した授業をすることで、技能の習得を図ることができると考えられる。

2 生徒の主体的な学びと技能を選択する力

当初のもう一つの課題として、生徒の主体的な学びがある。今回は、検証授業において主体的な学びとするためにグループ学習を取り入れた。そして、生徒の考えたことを裏付ける資料を、自ら収集して選択する技能の育成に重点をおいた。これらの技能は、東京都の学力向上を図るための調査でも毎年、大きな課題となっている。地理的分野の授業では、教科書や資料集、地図帳などから必要な資料を収集する学習活動を実践した。検証授業の中で、生徒の考えを裏付けるグラフや統計資料を指摘できた生徒が数多くいた。また、公民的分野では、検証授業の単元まとめで作成するレポートの根拠となる資料を自ら選択することとした。身近な題材であったため、多くの生徒が自ら適切な資料を収集し、選択することができた。このように、学年や分野は異なるものの、授業者が生徒の主体的な学びの場面を設定するとともに、資料を選択・活用する場面を配置することで、生徒は技能の習得が可能になると考える。

VII 今後の課題

1 資料の読み取りや選択の指導・改善

今回の検証授業や研究を進める上で行った実践を踏まえると、初歩的な資料の読み取りができていない生徒が見られた。また、資料を選択する学習を検証授業で実践した際に、グラフや統計資料ではなく、教科書の本文を多く引用した生徒がいた。教師側の意図としては、教科書に掲載されている写真、図、グラフ、表などを読み取った上で、それらを根拠に自分の考えを述べることを想定していた。しかし、一部の生徒は教科書の本文記述を根拠に自分の考えを述べていた。

今後、資料の読み取りについては、個々の生徒の学習状況に応じた読み取りを段階的に指導できる教材の開発が望まれる。また、資料を選択するとき何を根拠とするかについては、例えば、第1学年段階では教科書の本文を引用を「可」とするが、第2学年後半では、読み取ったグラフや表、写真などを根拠に自分の考えを述べるようにするなど、生徒の学習状況や発達段階を考慮した指導や年間計画の作成ができるようにしていきたい。

2 更なる評価の工夫

本研究では、学習目標を提示して、生徒が身に付けるべき技能の習得・活用を図った。しかし、その目標に到達できなかった手だてを詳しく考えたかは疑問が残る。本研究は、中学校社会科3年間を見越した研究である。今後、分野の接続や学年ごとの発達段階に即した評価の目標を示していきたいと考える。小学校社会科で習得した技能を中学校でどのように活用していくべきかが今後の課題となろう。小・中学校の系統的な技能の習得に関するカリキュラムの開発が期待される。

平成26年度 教育研究員名簿

中 学 校 ・ 社 会

地 区	学 校 名	職 名	氏 名
千代田区	麴 町 中 学 校	教 諭	下 川 真 世
墨田区	本 所 中 学 校	教 諭	◎種 藤 博
大田区	大 森 第 四 中 学 校	教 諭	中 村 豊
北区	稲 付 中 学 校	主任教諭	小 林 秀 樹
板橋区	志 村 第 一 中 学 校	教 諭	野 口 武 史
青梅市	第 一 中 学 校	教 諭	茨 木 雄 也
東村山市	東 村 山 第 五 中 学 校	教 諭	小 島 英 朗
東久留米市	南 中 学 校	主任教諭	松 本 賢
稲城市	稲 城 第 三 中 学 校	主任教諭	田 中 圭

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課
指導主事 藤 田 修 史

平成26年度
教育研究員研究報告書

中学校・社会

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成26年度第186号〕
平成27年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 正和商事株式会社